イエスにならう生き方を求めて

悩みを持つ人々の痛みに寄り添い、その悩みを少しでも分かち合うことのできる教会共同体をめざして

日本カトリック司教団著「いのちへのまなざし」増補新版より

平和を目指してともに歩もう

「剣を取る者は皆、剣で滅びる」（マタイ 26:52）イエス様に倣って、暴力に打ち勝ちながら平和を目指してともに歩むために、この一年間、ゆるしと対話を大切にしていきましょう。

社会福音化部部門長　酒井俊弘補佐司教

少しずつ、教会活動が再開されています。各地区で開催された学習会や講演会などの様子をご紹介します

学習会　大阪北地区社会活動委員会　学習会

カトリック門真教会　　小野幸治

12 月定例会時に、カトリック今市教会信徒で、92 歳になられた今でも元気に信仰生活に奉仕・活躍されている三島克己（かつみ）さんを講師にお招きし、学習会を行いました。戦前･戦中･戦後の激動時代を体験された三島さんのお話から、戦争のもたらす悲惨さと平和の尊さ等を学びました。講演内容は二つに分かれ、前半は戦前日本の戦争に至った歴史的事実が、後半はキリスト教の信仰に導かれ時代を歩んだ体験が話されました。

前半の歴史的経過のなかでは、普段私たちがなかなか知ることの少ない、様々な歴史事実が詳細に語られ、「何故、そしてどのように」日本が破滅に向かう戦争に突き進んでいったのかが説得的に語られました。“戦争の最初の犠牲者は「真実」だ”と言われます。過去の事実を、私達がしっかりとした歴史の記憶として留め置かなければ、「二度と過ちを繰り返さない」という決意も揺らぐことになります。三島さんのお話で二つのことが強く印象に残りました。

当時の様子を語る三島克己さん（中央右）

一つ目はご祖父様が日露戦争に従軍し、二百三高地の戦いを経験されたことです。日清・日露戦争は戦前日本の輝かしい戦績として称賛され、軍部の誇りともなりました。しかし実際に戦闘に参加した人々は無残に殺され、戦友の屍を乗り越えて戦う悲惨さを痛感しました。「こんな戦争は絶対にしてはいけない」ことを、繰り返し祖父から聞いたという三島さんのお話からは、歴史の表面にあるものと深層の人々の思いとのギャップを感じました。

二つ目は、大阪空襲時一緒に逃げた学友が、焼夷弾の直撃を受けて死亡した 1945 年 6 月 7 日という日を深く胸に刻み､爾来この日を同窓会にしていったというお話です。戦争は多くの未来ある若人を死に追いやるということ、そのことを忘れまいとする姿勢は学ぶべきであり、こうした貴重なお話を聞くことができることに、口述歴史の尊さがあります。

後半は、三島さん自身の信仰との関りも含めて体験されたことが話されました。中卒で国鉄に運転手として就職されたものの、「行政機関の職員の定員に関する法律」により分限免職されてしまいます。乗務中、交代駅でない駅で交代運転手が乗ってきて、職場へ帰ったら、区長のところへ行ってくれと言われ、電車区では区長から分限免職辞令が渡されます。突然渡されたという分限免職通知書は、任命権者の名も記さず公印も押印しない、ただの紙切れであったという説明から、当時の政府の非人間性が伝わってきました。こうしたことは、当事者以外からは聞き得ない貴重な証言です。また新憲法制定を体験され「各国憲法は、その一つ前の政治体制・時代に対する厳しい怒り、痛恨の念の反省に伴って制定される」という言葉を紹介し、軽々しい改正論議に警鐘を鳴らしました。　報告したいことは他に沢山ありますが、字数の関係から省略せざるを得ません。できれば当日学習会に三島さんが用意された資料に目を通すことだけでも、貴重な証言として受け止めることは可能です。今市教会に問い合わせて三島さんにお尋ねすれば、喜んでご提供頂けると思います。平和の語り部である三島さんの講義に参加できたことを主に感謝して、擱筆します。

「ワタシタチハ　ニンゲンダ」上映会

講演会　シナピスこども基金　こどもの権利を知るキャンペーン協賛

「在留資格のない外国ルーツの子ども達の生の声を聴き、未来を考える」

カトリック仁川教会　社会活動委員会

2 月 12 日（日）、標記のテーマで講演会を開催し、約 70 名が参加。講師は､日本で生まれ育ちながら「在留資格」のない「仮放免」状態の M さん（大学 3 回生）と弟の S さん（大学 1 回生）、そして後見人のビスカルド篤子さん。「仮放免」というのは、一時的に収容を停止されている状況で、住民票がなく、仕事をすることも健康保険に入ることもできず、移動の自由もない等、基本的人権が全て奪われている状態のこと。

二人は圧政状態のペルーから日本に逃れてきた両親から生まれ、父親が入管に収容され、その後「仮放免」となり、ある日突然ペルーへ強制送還された体験を持つ。

S さんは、父親を失ったショックと強制送還への恐怖や学校でのいじめで、将来への希望を失くし、学力も低下したが、真摯に向き合ってくれた担任の先生に出会い、志望高校に入ることができ、将来の「夢」も生まれた。「困っている人を支えられる教師になりたい」と教育学部に入学し、頑張っている。

就職活動中の M さんは、「故郷・日本で働き自立したい」と願いながら、「就職活動は許されても、就職は許されない現実」に苦しんでいる。しかし、多くの人に支えられていることを思い、「諦めずに、なりたい自分になれるように」歩き出している。

頑張っている彼らに“頑張って！”ではなく、人権に配慮できる社会にするために頑張らないといけないのは私たちだ。

彼らが、故郷・日本で在留資格を取り、強制送還されないために！

M さんのことばに耳を傾ける参加者

上映会　映画「ワタシタチハ　ニンゲンダ！」

姫路教会　　S.N

昨年、”社会活動委員のつどい”の後に上映された「ワタシタチハ　ニンゲンダ！」という映画を観て、私たちの住んでいる平和な日本でこのような差別、迫害が実際に起こっているのかと、大きな衝撃を受けました。その時に自分が感じた思いや疑問、問題意識を多くの人にも知ってほしいとコロナウィルス感染の防止策を取りながらこの映画会を開催しました。

2 月 18 日 (土)13 時～姫路教会ザビエル館にて約 50 名の方が集まり映画を鑑賞し、上映後、短い時間でしたが分かち合いの時間をもちました。この問題について祈っていくことが大切である、という意見と共に祈りだけでなくアクションを起こしていくことが今、必要なことではないか。また私たちの行動が本人や関係する人たちの小さな心の支えになるのではないか、と様々な感想、意見を聞くことが出来ました。最後に通常国会に再提出されている、出入国管理及び難民認定法等を改正する法律案の採択に反対し、廃案を求める署名運動を呼びかけていただき上映会を終わりました。

この映画を観た人たちが問題意識をもってそれぞれの場所でひろげていくこと、コロナのため活動が止まっていたけれどまた活動が動き出すきっかけになればと思います。

上映後多くの人は何か私たちにできる手助けはないかと思ったと思います。実際、姫路教会でも何か行動を起こしましょうと声をかけて下さる方がありました。

世界人権宣言は「すべての人間は生まれながらにして自由であり、かつ尊厳と権利とについて平等である」とうたっていますが、果たして日本において外国人の人権はどれほど尊重されているでしょうか。映画の最後に「私たちは動物ではない。私たちは人間だ！」と訴えていた映像が今も心に焼きついています。

※各報告の詳細はシナピスニュース 4 月号に掲載します。合わせてご覧ください。